



## 落ち着かない行動・不安・焦燥

No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後ご本人、介護者の状態
4	対応を工夫したケース	雨天時に訪問看護師の傘があるか心配しており、訪問が終わり看護師が施錠をし帰ろうとすると、本人が玄関から出ようとしていた。玄関内にもどってもらい、「傘はあるので大丈夫」と伝えて施錠するが、再び玄関から出てしまった。	訪問看護ステーション 看護師	独居。ヘルパーが朝昼夕と食事を準備し、促しにて食事ができている。排泄は自立している。歩行は手すりを使えば可能であるが、膝折れがみられ転倒の危険がある。短期記憶の低下は著明である。	転倒の危険もあるため寝室へ一緒に行って臥床してもらい、再度「いつも同じように施錠して帰るので安心してほしい」ということを伝え、退室した。ヘルパーなどの他のサービス担当者も同様の対応で統一した。	その後、担当者を見送りするために玄関へ出てくることはなかった。
5	対応を工夫したケース	着替えや排泄などが出来なくなり、アルツハイマー型認知症の診断を受けた。夕方になると不穏状態が見られ、就労中の娘さんが帰ってこない心配し外に出てしまい、徘徊に結びついてしまう。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	本人と夫、娘さんと3人家族である。マンションの3階（エレベーターなし）で生活している。娘さんは日中就労しているため、夫が対応している。夫は膝痛・腰痛を抱えており、長時間の立位は困難である。食事作りなど家事全般は娘さんが行っている。家族関係は良好。	活動量を増やし、レスパイト目的で「認知症対応型通所介護」の利用を開始した。（週3日）	週3日デイサービスを利用することで、生活のリズムが整い、夕方の不穏状態は軽減した。夫のレスパイトにもなっている。
6	対応を工夫したケース	言葉がうまく出ず、イライラしている。 職員によっては、本人からの拒否がある。	小規模多機能型居宅介護 ケアマネジャー	息子さんと2人暮らし。息子さんは、仕事のため帰宅が遅い。認知症状があり、1人では日常生活が成り立たない。	特定の職員が、本人の落ち着く場所へ一緒に行き、15分ほど側にいるようにした。	周りの人と馴染めないため、本人の安心できる場所であれば付き添っていると落ち着いてくる。
7	対応を工夫したケース	1人で外出しようとする。食べたことを忘れてしまい、度々台所や冷蔵庫を開けて食べ物を探す行動がある。	グループホーム 介護職	前頭側頭型認知症と診断された当初は、介護拒否や暴力・暴言があった。その後、落ち着きグループホームへ入居となる。	外出しようとするタイミングで、散歩に誘った。間食を用意した。	はじめは散歩をしても、その直後でも外出しようする事があった。散歩に付き添い始めて3カ月目頃から、グループホームの生活に馴染み、外出しようとする事が無くなった。
8	対応を工夫したケース	娘さんが忙しく、ほとんどグループホームに来ることができない。家族が来ないさみしさか、「～が死んだ、～が病気になった、家に帰らなければならない」と頻回に話す。荷物をまとめ、タクシーを呼んでほしいと話す。	グループホーム 介護職	独居。転倒による骨折のため入院。その後、老人保健施設を経てグループホームに入居。夫は死別し、娘さんがキーパーソンである。本人は何でここにいないか理解できていない。1人でも生活できていると思っている。	安心してもらえるような声の調子で「家族の方には病気ではない」「亡くなってはいない」と話をした。それでも本人が納得できない時は、家族に電話をし、直接話をしてもらった。	本人は、家族と話をする事で落ち着くことができた。夜間帯は家族が対応はできないため、管理者が来たら対応すると返事をする事で、納得し落ち着いている。

## 落ち着かない行動・不安・焦燥

No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後ご本人、介護者の状態
9	対応を工夫したケース	デイサービス時に何度も「さあ、帰ろう」と落ち着かなくなる。色々な部屋のドアを開けた後、トイレに行って席に戻ることを繰り返す行動がみられた。	グループホーム 介護職	独居。認知症のため服薬管理ができなくなり自己中断している。デイサービス週2回、訪問介護週10回利用。デイサービス以外はほとんど家で寝て過ごしている。	「気をつけてお帰りください」と否定せず見守り、レクリエーションに誘導したり、「この作業が終わったら帰りましょう」と声をかけたりして帰宅への気持ちを紛らわせるようにした。	しばらくは落ち着くが、1日のうちに何度かは同じことの繰り返しが続いた。デイサービスを利用して半年程経ち、以前よりは回数が減ってきている。スタッフは、その時の状況に応じて声掛けの内容を変え、対応している。
10	対応を工夫したケース	夏でも厚手の物を着てしまうので、ハンガーにかかった服の衣替えをした。すると、「物を盗られた」「誰か来た」などと落ち着かなくなり、職員が衣替えの説明してもずっとそわそわしてしまっただ。	グループホーム	グループホーム入居中。アルツハイマー型認知症があるが、基本的に自立しており自室内で過ごすことが多い。	冬服を元の場所に戻した。冬物を着て汗をかいているのも心配だったが、本人の気持ちを配慮しエアコンの調整や水分を多めに取ってもらうようにした。	今まで通り、自室で落ち着いて過ごせるようになった。
11	対応を工夫したケース	話をしていると昔のことや夫の事を思い出して泣き出し、自分のロッカーへ行って帰りの準備をすることがある。	デイサービス 介護職	まわりの人に気遣って、スタイルや顔をほめたり、食べ終わった食器を自分で片付けをしようとする。テレビを見る場所も他の人が後に居ると後ろに移動する。	テレビで好きな歌番組を流した。知っている歌と一緒に歌った。	本人が知っている歌が流れると一緒に歌って穏やかな表情になった。
12	対応を工夫したケース	自室のハンガーラックにかけていた服を何枚も着込んでしまうことがあったので、必要な分だけ残し、他は押し入れなどにしまった。服を盗られたと思った様子で、コーヒーカップなど物をタンスの中に隠してしまうことが続いた。何度もタンスの整理をされ、落ち着かなくなった。	グループホーム 介護職	自室で1人で過ごすことが多い。ほとんどのことは自分で出来る。	洋服をハンガーラックに半分ぐらい戻し、元の環境に近づけた。	本人は、タンスに物を隠すことがなくなり、落ち着いた。
13	対応を工夫したケース	夫の外出後、どこに行ったのか不安になってしまう。何度も窓から覗いたり、心配だという言葉がある。	看護師	夫と2人暮らし。夫は仕事や用事で外出することがある。	ホワイトボードを利用し、日付と時間、どこへ出かけたかを記載した。	見ることで思い出し、安心感が得られた。不安の軽減につながった。

## 落ち着かない行動・不安・焦燥

No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後ご本人、介護者の状態
14	傾聴と対応を工夫したケース	施設の色々なクラブ活動には参加せず、「疲れる」「苦しい」と引きこもっている。リハビリでは体調に合わせてマッサージや歩行訓練をしているが、それも「やめる」と言う。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	施設入所中の90歳代の方。「早く死にたい」「胸がドキドキするから薬をほしい」と大きな声を出したり、ヘルパーに攻撃的な口調で叱るように話す。毎週、施設に娘さんが訪問し世話をしているが寂しいと訴える。	リラックスしてもらえるように、足浴をしながら本人の気持ちを傾聴するようにした。	足浴は気に入っており、その時間は穏やかな時間を過ごしている。
15	傾聴と対応を工夫したケース	デイサービスの2～3時間は、夫と楽しく参加できているが、多数の人がいるような施設では不安が強く、その後は拒否してしまう。	訪問看護ステーション 看護師	夫のサポートもあり、生活面においては大きな支障なく過ごしている。短期記憶障害は著明である。	話を傾聴するようにした。口腔体操や足浴をしたり、一緒に合唱したりしながらコミュニケーションを取った。	数か月後には、多数の人がいるデイサービスでも表情が明るくなった。
16	傾聴と対応を工夫したケース	意欲低下によりデイサービスの拒否があった。家では寝ている時間となってしまう、昼夜逆転がみられている。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	娘さんと2人暮らし。一日に何度も娘さんと訪問看護ステーションに不安を訴える電話がある。曜日・時間・季節が正確に答えられない時がある。	生活リズムの改善と日中は他者との交流が図れるように、デイサービスを勧めた。デイサービスの職員が訪問し、安心してもらえるように関わった。	顔なじみの職員がいることで、レクリエーションを楽しめるようになった。最初のうちは緊張から食事も少なかったが、1か月後くらいからはほぼ全量摂取できており、日常生活の安定化を図ることができた。
17	傾聴と対応を工夫したケース	「帰りたい」「帰らなくちゃ」と話す。「子供は、どうしてるかしら」と心配している様子が見られた。	小規模多機能型居宅介護 介護職	以前は杖歩行であったが、現在は使用せず、比較的安定している。朝食は自宅で、昼・夕食は施設で食べている。	「おさんはお仕事へ行かれていますので、こちらで過ごしてお夕飯を召し上がって帰るとお子さんも安心しますよ」と伝えた。	少し納得いかない様子もあったが、理由を聞いて「そう…」と安心して席に戻った。
18	傾聴と対応を工夫したケース	デイサービス利用中は、常に家族のことが気になっている様子。特に子どものことが気になり、「家で三人の子供が待っている」と帰宅願望が強くなり、玄関より出ようとするのが数回あった。	小規模多機能型居宅介護 ケアマネジャー	独居であるが、日中は自宅が息子さんの仕事場となっている。週に5日のデイサービスを利用している。	ソファに一緒に座り、手をつなぎながら子どもの事や両親の事を本人が話すのを傾聴した。話は次々に変わっていき、時には話す内容が理解できないことがあっても、相槌を打ちながら傾聴した。	傾聴していると、本人は次第に落ち着き、そのまま寝てしまうこともあった。

## 落ち着かない行動・不安・焦燥

No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後ご本人、介護者の状態
19	傾聴と対応を工夫したケース	夕方の時間帯に、帰宅願望が多くみられる。強い不穏はないが、落ち着かない様子で席を離れ、不安そうな表情で「暗くなる前に帰らないと…」 「そろそろ帰ります」などと職員に話す。	小規模多機能型居宅介護 介護職	娘さんと2人暮らし。娘さんは就労されているため週5日デイサービス利用(夕食を食べて帰宅)。また、月1~2日宿泊を利用している。	傾聴し、夕食時間や帰宅時間を伝えると納得し落ち着くが、幾度も話すときもある。よく観察すると、本人が苦手とする相手に対して距離を取ろうとしていた結果、帰宅願望につながっていることが分かったため、座席位置の工夫をした。	帰宅願望もなくなり、落ち着いて過ごせる時が増えてきた。また、笑顔も沢山みられるようになった。
20	傾聴と対応を工夫したケース	玄関のドアをたたいて「帰りたい」という帰宅願望があったり、施設内を歩いて不穏状態になってしまうことが多々ある。	小規模多機能型居宅介護 介護職	独居であるが、息子さんが朝食、夕食の準備をしてくれる。認知症以外の病気はない。	夕方に不穏になることが多く、「息子が家で待っているから帰りたい」と話す。男性スタッフを見て「息子がいた」と言う事がよくあるが、息子であるという内容は肯定も否定もせず、「今宿題をしているから、終わったら一緒に帰ろう」などと声掛けしている。	息子さんと思ったスタッフに「私も一緒に手伝うから宿題終わらせて早く帰りましょう」と話しながら、スタッフのそばで落ち着いて座っている。息子さんと認識されたスタッフは、なるべくゆっくりと本人が落ち着けるよう振舞っている。
21	傾聴と対応を工夫したケース	膝の痛みのため、近隣の提携病院の整形外科へ車椅子で受診となった。待ち時間が1時間以上かかり、その間「保険証持った？」 「お金持った？」の会話を繰り返し、歩き出そうと車椅子から立ち上がることがあった。	特別養護老人ホーム 介護職	特別養護老人ホーム入所中。食事をすぐ食べられる状態まで用意すれば、自身で食べることが出来る。歩行は安定している。同じことを何度も繰り返し話す。	同じことを繰り返し話す時には、終始穏やかな口調で対応した。 また、歩き出そうとする時には、話をしながら、歩こうとする気持ちを反らしたり、車椅子で院内フロアを移動しながら気分転換を図った。	立ち上がることや転倒することなく、受診は滞りなく実施できた。
22	傾聴と対応を工夫したケース	不安で、自分が今住んでいる家を引っ越そうと言う。	地域包括支援センター 社会福祉士	不安感を強く訴える。	不安に思っている内容とは違う方向に意識を向けるように話をしていった。	本人が興味ある分野で話を進めていったところ、不安に関する訴えが聞かれなくなった。